



しろや！ 広島城

No.70



『象之図』江戸時代後期（国立国会図書館デジタルコレクションより）
享保14年（1729）のゾウの図

広島城下にゾウが来た?! ~江戸時代のゾウの旅~

突然ですが、長い鼻に大きな耳、動物園の人気者といえば、さて、なんでしょう？そう、答えはゾウです。現代では誰もが知っている、おなじみの動物ですよね。しかし、江戸時代の多くの人々にとって、ゾウは仏画などでしか見ることのない想像上の生き物でした。そんな幻の珍獣が長崎から江戸まで長い旅をしたから、さあ大変！今回は、そんな江戸時代のゾウの旅をご紹介します。

ゾウの来日

享保13年（1728）6月、オスとメス2頭のゾウが長崎にやって来ました。ゾウは、交趾国（現在のベトナム）から8代将軍徳川吉宗への献上品とし

て、清（現在の中国）の商人、鄭太威^{ていたい}によってもたらされました。元々、外国の学問や文物に関心の高かった吉宗自らが所望したと伝えられており、一説には、ゾウの軍事利用を考えていたともいわれています。

生きたゾウが日本にやってきた記録は享保以前にも5度ほどあり、享保13年の来日は慶長7年（1602）に交趾国から徳川家康に献上されて以来、約130年ぶりの出来事でした。そのため、生きたゾウを見るのは誰もが初めてだったのです。

ゾウは、交趾国広南港（現在のホーチミン市）を出発後、船でおよそ1か月かけて長崎に到着しまし

た。しかし、残念ながらメスのゾウは9月に長崎唐人屋敷で病死してしまいました。そのため、オスのゾウだけが翌14年（1729）3月13日、江戸に向けて旅立ちます。江戸までの道のりは、およそ354里（約1,390km）。長崎から、2か月以上陸路を歩く大変な旅でした。

ゾウの旅路

ゾウは長崎を出発し、西国街道を通過して京へ、そして東海道を通過して江戸へと進みました。将軍への献上品に何かあっては一大事。通行する街道の宿場や沿道の村々には数々の規制が敷かれ、出発に先立っては、長崎奉行から道中を円滑に移動できるよう通達も出されました。そこには、ゾウが通行する際は騒がしくしないこと、エサや飲み水を用意しておくこと、ゾウが川を渡る方法、宿泊する厩^{うまや}についてなどが記され、細かな指示がされていました。中には、エサについて「青草は一日に300斤（約180kg）ほど食べる」という記述もあり、ゾウを迎えるため沿道の人々の苦労は大変なものであったろうと想像できます。

広島城下にゾウが来た！

4月6日、いよいよゾウが広島城下にやって来ました。広島でも、その通行には細心の注意が払われていたようで、万一、通行中に火事があったとしても、火事を知らせる鐘を鳴らすことが禁じられたほどでした。ゾウの宿所は、広瀬組堺町二丁目（現在の広島市中区堺町一丁目）の馬継場付近で、そこに新たに建物が作られました。

ゾウの宿所については、長崎奉行が、「大ぶりで丈夫な厩にするように心掛け、ゾウが寝るときは藁を敷くように」という通達を出しており、ゾウが宿泊する予定の場所には、専用の建物が作られたのです。また、当時在国中だった広島藩主浅野吉長も堺町内（現在の広島市中区堺町）に出向いたといわれ、ゾウを見物したことが伝えられています。

京都そして江戸へ

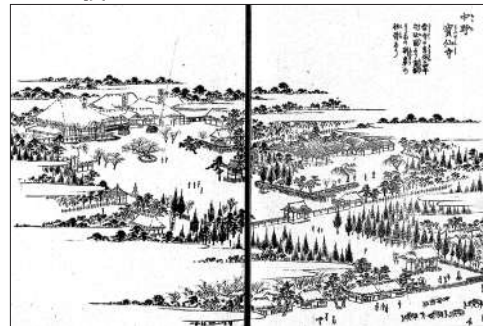
広島藩を発った一行は、4月8日に四日市宿（現在の広島県東広島市）、4月11日に神辺宿（現在の広島県福山市）を発ち、東に進みます。4月26日、京までたどり着いたゾウは、宮中の清涼殿で中御門天皇に拝謁することになりました。宮中に参内し、

天皇に拝謁するためには爵位が必要だったことからゾウには特別に「広南従四位白象」という位が授けられました。天皇は幻の珍獣にいたく感心し、宮中では「象」をお題にした歌会も開かれたのでした。

その後、京の三条大橋を出発し、東海道をさらに進み、5月25日、とうとう江戸に到着します。江戸では、ゾウは到着前から人々の話題となっていました。すでに京や大坂で刊行されベストセラーとなっていた『象志』という書物や、ゾウに関するかわら版などが、人々の興味をかきたてていたのです。

所望した張本人である吉宗も、長崎にゾウが到着して以降、よほど楽しみに待っていたのでしょうか。早くも27日には、江戸城本丸の大広間で対面しています。また、江戸ではゾウの浮世絵、双六、人形など様々なものが売り出されるとともに、歌舞伎の演目になるなど、一大ブームとなりました。

ゾウのその後



『江戸名所図会』（中野宝仙寺）
（国立国会図書館デジタルコレクションより）

旅を終えたゾウは、将軍家の別邸だった浜御殿（現在の東京都中央区浜離宮庭園）で飼育されることになりました。寛保元年（1741）まで13年間ここで飼育されましたが、経済的な理由などにより農民源助に払い下げられました。

そして、翌2年（1742）に病死し、その遺骨は中野宝仙寺（東京都中野区）におさめられました。天保7年（1836）に刊行された『江戸名所図会』巻4の中野宝仙寺の箇所には享保のゾウの遺骨が納められていることが紹介されています。長崎から江戸まで長い道のりを旅をしたゾウは、多くの人の心に強く残り、伝えられたのです。（正連山 恵）

【参考文献】

- 『広島県史 年表』広島県史編さん室 1984年
- 石坂昌三『象の旅 長崎から江戸へ』新潮社 1992年
- 『動物の旅～ゾウとラクダ～』豊橋市二川本陣資料館 1999年
- 菅波哲郎『江戸時代の神辺宿 神辺本陣』2020年
- 広島県立文書館インターネット古文書講座（第6回）「象止宿 刻御付廻り御衆中宿々賄料之帖」



－これからの広島城－

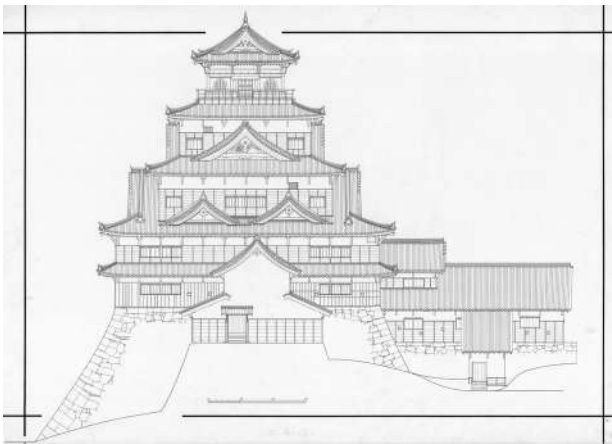
木造復元基礎資料の収集①

広島市では、令和3年度から天守の木造復元の実現に向けて調査検討を進めています。

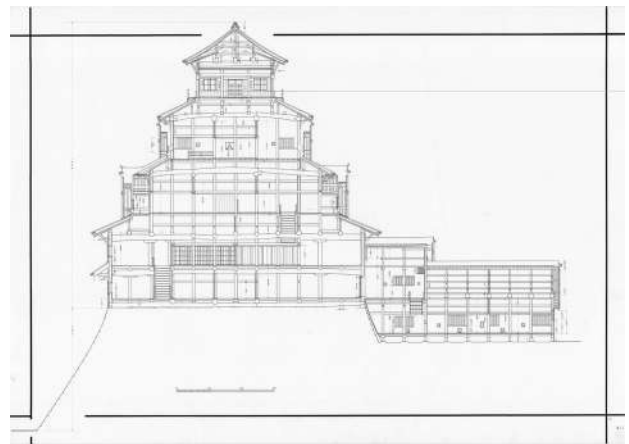
現在、国指定史跡内で城郭建築物を復元するに当たっては、文化庁が定める様々な復元基準をクリアする必要があります。まず、当時の構造等が確認できる図面や古写真等が必要となります。広島城天守については、外観・内観の古写真や実測図などの資料が他の城郭よりも比較的豊富に存在しているといわれています。

現在も資料は調査中ですが、今回は図面や古写真の一部をご紹介します。

① 戦前、国により作成された実測図



<天守南立面図>



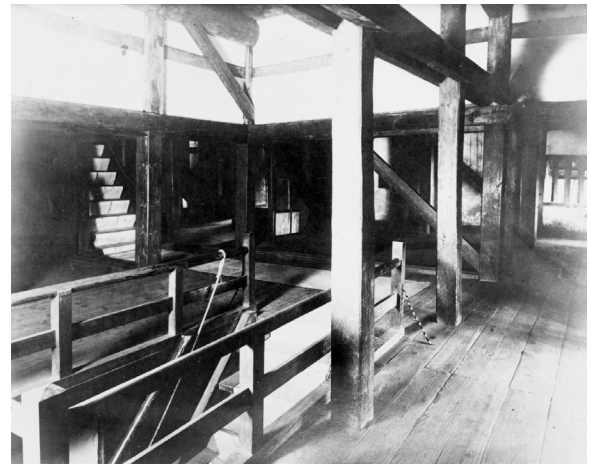
<天守東西断面図>

画像提供：奈良文化財研究所

② 天守内部の架構や室内の仕様を確認することができる古写真



<天守2層内部>



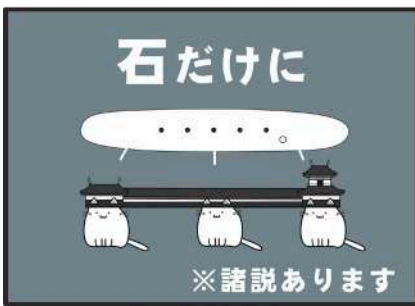
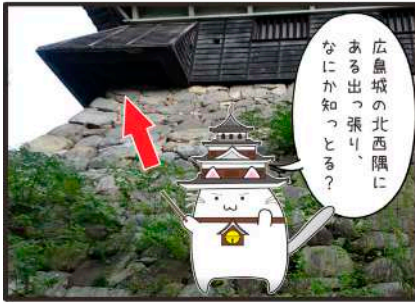
<天守3層内部>

所蔵・提供：広島市公文書館

次回のコラムでは、広島城天守台の石垣調査についてご紹介します。

(広島市市民局文化スポーツ部文化振興課)

しろうニャのお城講座？



しろうニャ！ 広島城 ～石落としから何落とす??～

今回は、しろうニャさんがお城の豆知識を紹介してくれます。でも、どうやら、二の丸ズはちょっと困惑しているようですね…。

石落としは、お城の防御設備の一つです。戦のとき、石垣を登って侵入しようとする敵兵を上から攻撃し、一掃する目的で、天守や櫓、城門など防衛の要となる場所でよく用いられています。

広島城の天守では、石落としは北西の隅に設けられています。外側から見ると、斜めに出っ張っていて、まるでスカートをはいているかのよう。このような形の石落としは「袴腰型」と呼ばれます。

残念ながら、現在天守の周囲は安全のため立ち入り禁止となっているため、外からは間近に見ることはできませんが、天守の内部からは見ることができます。広島城天守の第一層の石落としには、飛び出した部分をガラス張りにしてありますので、下をよくのぞくことができます。実際に見ると、思った以上に高さがあるって驚くかもしれません。



広島城天守の中から見た石落とし

さて、「石落とし」は、その名前から、ここから石を落としていたと思われがちですが、当時はもっぱら主要な飛び道具である弓や鉄砲が使われたようです。ほかにも熱湯や汚物（ヒドイ…）などを落としていたという説もあります。古くは、石を落としていたこともあったようですが…実際には敵にむかってストーンと落とすのは難しいかも。せっかくなまいダジャレを思いついたみたいですが…残念でしたね、しろうニャさん（笑）

（吉田 文）

しろうや
！
広島城

編集・発行

公益財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町 21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

令和3年12月15日発行

広島城利用案内

開館時間 9:00～18:00（12月～2月は9:00～17:00）
入館の受付は閉館の30分前まで

入館料 大人370円（280円）
高校生相当・シニア 180円（100円）
中学生以下無料
（ ）内は30名以上の団体料金

休館日 12月29日～31日（臨時休館あり）

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>

📁 「しろうや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます